

(別紙様式)

(A3判横)

令和2年度学校自己評価システムシート(県立行田特別支援学校)

目指す学校像	<ul style="list-style-type: none"> 「わかった」「できた」を重ね、「自信」を深め、生き生きと輝く児童生徒を育てる学校 地域社会における特別支援教育の推進に寄与する学校
--------	--

重点目標	1【学び】ねらいを明確にした授業の実践と適切な評価及びその活用 2【自立】小学部・中学部・高等部の一貫したキャリア教育と進路指導の充実 3【支援】児童生徒の個の課題に向き合う校内支援体制の充実 4【貢献】インクルーシブ教育の推進に寄与するためのセンター的機能の充実 5【安心】子供たちが安心してのびのびと学ぶことができる環境の整備
------	---

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者 生徒 事務局(教職員)	名 名 名
-----	-------------------------	-------------

学 校 自 己 評 価		学 校 関 係 者 評 価					
年 度 目 標		年 度 評 価 (2 月 1 日 現 在)					
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	教室の構造化等、物理的な環境整備が充実しつつある。論理的に、継続的な研修の必要性について教職員が共通認識を持つとともに、ノウハウを共有するための学ぶ機会の設定が重要である。プランBの改訂を行い、適切な評価のための環境が整いつつある。児童生徒の「今後の課題」を明確にするためにアセスメントを充実させ、適切なねらいを定め、評価表を活用し、評価を行い、次の授業に生かすというサイクルを確立したい。そのためには、工夫して無理なく継続できるシステムを構築することが課題である。	ねらいと評価が明確な授業の実践	①教育的ニーズや発達段階等に応じた適切なアセスメントを実施し、指導のための根拠を明らかにする。 ②保護者の理解を得ながら、一人一人のプランBにおける目標・手立て・評価を定め、担任間で共有するとともに、それらを日々の授業の中で活かす。 ③授業等の評価を次の目標に活かすことを定着させ、日々の授業とプランBが密接に関連するサイクルを構築する。 ④高等部の学びを踏まえたプランBの改訂を検討し、指導・支援を充実させる。 ⑤学習環境の整備の意義や必要性、児童生徒の特性に応じた指導法について、職員間の共通理解を深める。	①教員による実態把握のためのアセスメント方法の共有と授業における客観的指標の活用 ②プランBにおける目標・手立て・評価を反映させた授業の計画と実践 ③評価表による客観的評価の実施と評価結果のプランBへの反映 ④高等部における改訂版プランBの作成 ⑤学習環境の整備と児童生徒の特性に応じた指導法に関する研修等の実施	①8割の教員が客観的なアセスメント方法を学部又は学年等で共有し活用できている。 ②プランBにおける目標・手立て・評価が授業とリンクしていると自己評価している教員は8割強となっている。 ③評価表による客観的評価を実施している教員の割合は8割。評価表による評価結果をプランBに反映できている教員は8割弱となっている。 ④高等部におけるプランBの改訂については、引き続き検討を進めている。 ⑤行徳虎の巻(本校独自マニュアル)を全職員で共有。HPアップし周知。自閉症スペクトラム障害の子のための指導支援等の研修資料も校内HP上に掲載し共有した。自主参加による各種勉強会(9回)や研修報告会(7回)を実施。	A	新型コロナウイルス感染症の拡大防止を図りながら、従来の授業形態での対応が困難な場合が多くあり、集団活動等を行いながら、指導し評価をするということについては難しい部分があった。現在の状況を踏まえた指導と評価についてさらに検討が必要であると思われる。
2	高等部においてキャリアマトリクスが作成され、指導の場面で活用されてきている。それぞれの発達段階において学ぶべき項目を共通理解し、小中高一貫したキャリア教育に生かすことが課題である。高等部卒業を間近に控えた生徒については下学部・学年での指導を十分踏まえ、現状の発達段階や生活年齢に即した指導を充実させることが必要である。また、それ以外の児童生徒についても、卒業後の社会生活を想像し、現在の発達段階や生活年齢でのねらいを共通理解したうえで指導に当たることが必要である。	小中高一貫したキャリア教育と進路指導の実践	①作業学習における評価表の活用を通して、学習のねらいを明確にし、生徒のモチベーションを高める。 ②キャリアマトリクスを一つの目安とした現段階での生徒の評価を保護と教員が共有し、目標設定に活かす。 ③中学部と高等部において評価の指標等について情報共有し、進路指導や作業学習に係る中高の連携を強める。 ④中学部段階から高等部卒業後の進路への意識付けを進める。 ⑤保護者に対し、早い段階から進路に関する情報を提供し、意識の向上につなげる。	①評価表を活用した作業学習の計画と実践 ②キャリアマトリクスによる実態把握の実施と結果の活用 ③進路指導(職業教育)に関する中高の連携会議の実施 ④中学部段階における進路をテーマとする指導の計画と実施 ⑤小学部保護者への進路に関する情報提供の計画と実施	①中学部・高等部の作業学習において9割弱の教員が評価表を活用して指導を展開している。 ②キャリアマトリクスについては、教員全体での情報共有が不十分であり組織的な活用に至っていない。 ③中高連携の会議を実施することはできなかった。 ④進路指導に関する授業として、生徒が実際にリサイクルやシュレダー作業あるいは校内で受注した仕事を体験するという取り組みを実施した。 ⑤小学部保護者向けの進路だよりを初めて発行し、保護者から好評を得た。	B	学部間の連携や外部の進路関係機関との連携については、ある程度制限せざるを得なかった。そのような状況でも可能な指導形態について検討していくことが必要かと思われる。例えば、ICTのさらなる活用と、多くの教員による実践を広げる必要がある。
3	特に思春期以降の生徒については、生徒指導上の多くの課題を解決するための協力体制が必要である。この点については、前学部又は前籍校等との緊密な協力が求められている。また、実態が大きく異なり、指導法の工夫が必要な重複障害のある児童生徒への対応についても、根拠に基づく指導の充実と担当者が孤立することのないような協力体制の確立が重要である。	児童生徒の個の課題に向き合う校内支援体制の構築	①生徒指導上の課題を有する生徒等に対し、組織的な指導・支援を行うための体制を整える。 ②特に配慮を要する児童生徒に係る基本的な対応について、全職員で共有するとともにカウンセリングマインドの向上に取り組む。 ③重複障害のある児童生徒の教育課程について検討し、指導・支援の充実につなげる。	①計画的、多面的に指導・支援を行うための組織体制の構築 ②特性のある児童生徒への基本的対応に関する研修等の実施 ③重複障害のある児童生徒の具体的指導に関する研究機会の設定	①担任外の生徒指導主任やコーディネーター等の教員と担任とが連携し情報共有に基づいた多面的な指導支援を展開した。組織体制の構築に関しては途上である。性に関する指導に関して、次年度に向けた系統的組織体制が構築されつつある。 ②自主的な研修会が多数設定されるとともに、ケース会議を積極的に開催することを通して、児童生徒への支援に対する教員の意識が高まっている。 ③組織的な研究機会を設定することができなかったが、重複学級の指導の充実に向けた教員の課題意識は高まっている。	B	担任外の教員や、その都度必要となる関係者が協議し、迅速な対応を行った。個々の対応力に依存せざるを得ない面があり、人材の入れ替わりがあっても変わらぬ対応が可能な組織づくりが課題である。
4	地域の特別支援学級に通学している児童生徒の保護者や担当する教員にとって、特別支援学校の情報はつかみにくい状況にある。積極的に情報発信することで、地域の子育て支援や特別支援教育の推進に寄与できるものと思われる。また、学区内小中学校との相互理解や連携を深めることが期待されている。	積極的な情報発信と連携	①地域の特別支援学級担任と本校教員との情報交換等の機会を設定することなどにより、相互理解を深める。 ②学区内の学校(特別支援学級)等への特別支援教育に関する情報提供を積極的に進め、地域の特別支援教育をサポートする。 ③地域の保護者等からの相談に応じることができる機会を設定することなどにより、地域の子育てを支援する。	①地域の特別支援学級担任にとって手軽で身近な相談・情報交換が可能な環境の整備(電子会議室等) ②学区内の特別支援学級等の授業研究会等への参加と情報の提供 ③地域の関係機関との連携と相談機会の提供	①学区内の小中学校の教員向け「特別支援学校体験事業」を新たに企画し、来年度からの本格実施に向け始動。また、学区内の中学校特別支援学級担当者対象の進路指導説明会を実施し13校から14名が参加。進路指導に関する情報提供を行った。 ②学区内の特別支援学級等の授業研究会に職員を派遣(8回)したほか、コーディネーターによる巡回相談を延べ50回実施。 ③学区内市教委担当者との連携会議については、予定回数を実施できなかったが、次年度に向けて3月に実施予定。	B	学区内の特別支援学級を担任する教員との連携が課題である。情報を欲する当事者と、情報を提供する用意のある本校担当者とのスムーズな連携システムの構築が課題である。
5	児童生徒が安心してのびのびと学ぶことができる環境の構築のために努力を継続しているが、道半ばである。また、災害時の避難所として実際に本校を使用した際に、浮かび上がった課題を、今後解決していく必要がある。	安心安全な教育環境の整備と災害時対応の確立	①学校からの教育活動に関する各種の情報を積極的に発信し、保護者や地域の信頼に応える。 ②児童生徒の健康と安全を第一に、危機管理の視点で教育活動や校内環境を点検・整備する。 ③災害時における校内の対応と校外の対応を整理し、いざというときに機能する校内体制を整える。	①ホームページによる情報発信の充実 ②各種対応マニュアルの見直しと各種点検・訓練の実施 ③避難所開設時の対応マニュアルの作成	①ぎょうとく日誌45回、校長室だより123回更新。昨年度比更新回数増加。 ②不審者対応、救急対応(心肺蘇生)に係る職員研修動画を作成し、いつでも学べる環境を整備。今般の新型コロナウイルス感染症対応については初期の段階から担当者が素早く反応し、消毒用の薬剤を各クラスに配付するなど効果的に機能し、児童生徒の安心安全につながった。 ③避難所における飲料水確保のための自動販売機設置(令和3年度～)準備を進行中。避難所開設協力職員の募集をはじめとする校内体制を構築中である。	A	新型コロナウイルス感染症拡大防止に関して、今後変化する状況に対応することと、平時とは異なる緊急時・避難時の対応について確認し共通理解する必要がある

学校関係者評価	実施日 令和3年3月5日
学校関係者からの意見・要望・評価等	<ul style="list-style-type: none"> プランBにおける目標・手立て・評価が授業とリンクしている与自己評価している教員が8割を超えていることは大変すばらしい。 目標達成に向けて、教員研修を重ね、新しい評価表と作業ノートを作成し、効果を上げている様子がわかった。 数多くの自主勉強会や研修会の実施について感服している。 発達段階が様々な子ども達に対し、1人1人に合った「計画、実行、評価」ができ、それを教員同士が把握し合っていることがわかった。ぜひ今後とも続けていただきたい。 教員による実態把握のためのアセスメント方法の共有について家庭にもフィードバックし学校教育と家庭教育で連携をとるのはいかがでしょうか。 評価表と活動が1対1対応しているため、評価のしやすさがあったと推測できる。 キャリアマトリクスでの指導内容をどの授業場面において指導、活動設定するのかを検討する仕組み(1の授業実践とも連動)を構築することが今後重要と考える。 コロナ禍の中でも指導方法を工夫し、生活単元学習や特別活動の学習において進路指導・キャリア教育のねらいを達成されている。 学部間や外部の進路関係機関との連携が次年度の課題。ウェブ会議などICT活用を進めてほしい。 小学部の進路だよりは早くから勉強になりとてもよかった。ぜひ継続を。 担任外の生徒指導主任やコーディネーター等がチーム支援の軸となってきたことが大いに評価できる。 児童生徒に対する職員の共通理解と支援体制の構築は必要であり、教員の支援に対する意識が高まっているのはすばらしい。 保護者アンケート結果から学校への相談のしやすさを感じる方が多くいること、情報共有がしっかり図られていることがわかった。 小1～高3まで同じ学校で育つ最大のメリットである指導の継続を期待。 特別支援学校側からの情報提供を継続的に実施しており評価できる。授業研究会への参加を通して連携強化と特別支援学校に入学の可能性のある児童生徒の情報を得る機会にもなり、進路指導につながるものと評価できる。 特別支援教育に関わる全ての教員が資質向上することで地域での就学の機会も増えると考えられる。今後も情報発信し、本校教員が地域の特別支援教育の中心となることを期待する。 ホームページを通じた情報発信は様々な災害時の情報発信の起点にもなり得ると考えられ、その充実を図ったことには大いに評価できる。今後、関連機関との情報共有の仕組みを検討。 コロナ禍でも感染予防に注意しながら学校生活を継続したことに多くの保護者から感謝の言葉を聞いている。 コロナ禍で対象を限定した引き取り訓練はよかった。保護者を巻き込んだ災害対応の実施も視野に入れてはどうか。

